

# 島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第8号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン  
研究会事務局  
所在地：〒690-8504  
島根県松江市西川津町 1060  
島根大学法文学部 渡部研究室  
発行：2018年6月9日

## 【 研究小論 】

### ハーンと読者と時代

会長 常松正雄

松江市立中央図書館の「小泉八雲に学び・親しむ」という講座に、毎回出席して、最前列で、講師の真ん前に席を取って、誠に熱心に聴講していらっしゃる方があって、その真面目さには感服の至りである。実は、その方が、昨秋講義終了直後、私のところに来られて、「こんなものを書きましたから、読んで頂けませんか」とおっしゃって、プリント・アウトされたA4版の資料を渡された。

帰宅して開いてみると、「小泉八雲『勝五郎再生記』」とあって、7頁の好論であった。誠に元気なこの方は、身体に障害を持つ身ながら、八雲が程窪村（現・東京都日野市程久保）で伝えられていたとされる話を再話したとされる日野市まで、自ら足を運んで、作品中に言及されている家や不動尊等々を訪ねて検証した上で、この論文を書き上げられたことが分かった。

頭が下がる思いで、この隠れたハーン研究家の作品を読了後、折角読ませて頂いたので、礼状に合わせて、原文解釈の誤りと、私なりのコメントを送った。すると二・三日後で、礼状と共に次の質問が同封されて来た。

「胎内で取り上げた『あまりにあからさま過ぎるので省くのを良しとした』との部分ですが、『あからさま過ぎる』とは何が『あから

さま過ぎる』のか、私には理解不十分です。恐れ入りますが今一度ご教示賜れば幸いです」と。

そして以下のテキストが続いていた。

“... and after that I stayed for three days beside the *kamado*. Then I entered mother's honorable wombs. ... I remember that I was born without any pain at all. — Grandmother, you may tell this to father and mother, but please never tell it to anybody else.”

八雲割注

Here I think it better to omit a couple of sentences in the original rather too plain for Western taste, yet not without interest. The meaning of the omitted passages is only that even in the womb the child acted with consideration, and according to the rules of filial piety.

（下線 常松）

ハーンは、「省略された文言の意味は、西洋の読者にとっては、むしろ分かりきったことであるが、関心が無きにしも非ず」と述べて、その省略部分の意味を付け加えている。

この注から分かることは、ハーンは、西洋の読者に気遣ってこの省略を良しとする判断を下したということ。その上で、われわれが考慮すべきことは、「勝五郎再生記」が『仏の畑の落穂』に収録されて出版されたのは1897であるという作品と時代との関係である。

ハーンが、来日後出版した 10 巻余の作品は、すべて、まずアメリカの読者に対して向けられていることを頭に入れて読むことが必要ではないだろうか。そのことを頭においてみると、この作品が世に出た時代背景、特にその主要読者が過ごしているアメリカ社会の状況はどうであっただろうか。

通説によれば、ハーンが出版された約 120 年前、十九世紀末のアメリカ社会は、依然として大英帝国のヴィクトリア朝的価値観に支配されていたと言われている。ハーンがアメリカの読者を頭に入れて気遣ったのは、まさにこの点ではなかったろうか。

わたしはこのような趣旨を述べて、手元の *Longman Dictionary of English Language and Culture*, 1998 の以下の解説を上記の質問の答えに添えて送った。

**Victorian** 3. having the strict moral attitudes that are believed to be typical of the Victorian period. Victorian society was thought to have very strict rules about moral behaviour, especially concerning sex, and this meant that subjects like sex were rarely mentioned and people often pretended to have better moral principles than they actually had: *Her father's Victorian attitude made her teenage years a nightmare.* (下線 常松)

ハーン作品を読む場合に、彼が第一に頭に入れていた読者と、彼の作品が出版された時代を考慮して読むことも大事な点の一つではないだろうか。

## 【 読書会に参加して 】

古き良き日本人

林 満

昨年末、嵐先生に誘われてハーン研究会に入れてもらうことになった。恥ずかしい限り

だが、ハーン作品の原文は松江市・八雲会が主催する「ヘルン青少年スピーチコンテスト」のテキスト以外見たことはなかった。

ハーン研究会で初めて熟読したハーン文は、『知られざる日本の面影』の最後に載っている「さよなら」であった。彼が松江の尋常中学校の英語教師として一年あまり勤務した後、新勤務地の熊本に向かって発つ前に学生に向かって行ったお別れの挨拶である。

その中で、学生が彼に対して示した「天皇陛下のために死にたい」という願望を holy と称賛している。西洋に追いつけ追い越せと国家一丸となって取り組んでいた時代の事とは言え、彼がそれをことさら取り上げたのは、古くから受け継がれた日本の精神性・倫理性に深く共鳴していたことの現れであると思える。

ポルトガル船による鉄砲伝来以来、西洋人との交流が活発になる中、いろいろな西洋人が、西洋人とも他のアジア人とも異質な日本人について多く書き残している。

幕末の日本を訪問したトロイの遺跡で有名なシュリーマンは、その旅行記で次のようなエピソードを紹介している。入国時、面倒な手続きに便宜を図って貰おうと心付けを渡そうとするが、「日本の男子はそういうことで義務をないがしろにしない」と、税関の役人は決して受け取らない。しかし賄賂を渡そうとした彼に対して、義務に反しない範囲で親切に対応してくれた。

また、明治初期に北日本を旅行したイザベラ・バードは、『日本奥地紀行』のなかで、貧しい田舎の休憩所で、品のない服装をした女性は、彼女が置いていった二銭か三銭を、お茶ではなく水しか飲んでいないからと受け取らず、通訳を通じて返した。そしてこの女性の行為に慰さめられたと書いている。

西洋化の進んだ現代日本に、古い日本人の精神は消えてしまったのか？ハーンが今生きていればもう日本に彼の安住の地はないのかも知れない。

ただ、七年前の東日本大震災の時にみせた日本人の姿は、世界に強烈な印象を与えた。百年程度では消えてしまわない DNA が残っているのかも知れない。

私は現在、通訳案内士として外国人に山陰地方の観光地を案内している。十数年前に英語学習の一環として国家資格を取った。その資格を実際に使うようになるとは夢にも思わなかったが、最近境港に大型クルーズ船が入港するようになり、英語圏の観光客をバスで案内することになった。その中で、観光地を楽しんでもらうように案内をすることが仕事であるが、ハーンが愛した古い良き日本人をさりげなく紹介することを意識しながらガイドをしている。

これから諸先生のご指導を得て、本当にちらっとかじったに過ぎないハーンの神髄を探っていきたい。

## 【 本の書棚 】

### アメリカ文学史におけるハーン

事務局長 横山 純子

ラフカディオ・ハーンはアメリカ文学史の中であまり記述されない、記述されたとしても少ししか言及されていない作家である。それでもアメリカ文学関連の本をひもといてどのように記述されているかみてみたい。

まず、大橋健三郎・斉藤光・大橋吉之輔編の『総説アメリカ文学史』（研究社、1975、1986）の中でハーンが「リアリズムと自然主義の文学」の「世紀末の作家」の項で取り上げられており、「George W. Cable に刺激されて、『地方色』に興味をもち、Creole を扱った作品を残しているが、嵐で行方不明になった子供の物語 *Chita* (1889) は、ピエール・ロチの影響を示している。*Youma* (1890) はマルチニークの奴隷反乱を扱い、東洋の伝説を集めた *Some Chinese Ghosts* (1887) などエキゾティシズムの作家として活躍した。日本での小泉八雲としての活動は周知のとおりだが、Hearn のアメリカ文学に対する貢献は一時的なものであったといえる。Katherine Anne Porter は『彼は二つの文化の通訳になったが、その二つの文化は同じように彼にとって異郷(alien)のものであった』と述べている」(226-227) と記述されている。しかしハーンのアメリア文学への貢献が一時的なものであるとは私には思えない。

私の恩師・銭本健二先生は、生前、ハーンがアメリカの南部文学の中で位置付けがされていないことを指摘しておられた。アメリカ南部文学においてハーンはどのように扱われているのだろうか。そこで島根大学附属図書館の書庫で、題名に惹かれて高橋正雄著『アメリカ南部の作家たち』（南雲堂、1987）という本を手にとってみた。この本でのハーンへの言及は2箇所あったが、いずれもケーブル等の他の作家をハーンがどう評価しているかを記載しているだけで作家としてのハーンには言及がなく、残念であった。

しかしアメリカ南部文学の中でハーンを捉えている本に、志賀勝著『アメリカ文学の成長』（研究社、1954、1983）がある。志賀は *Chita* をハーンの「日本渡来までに書いた一番価値ある作品」として取り上げ、「アメリカ南部の明るい色彩と空気と、そして南欧的な文化の匂いは、若い Hearn にとって、最も好ましくまた有益な刺激であったことはたしかであり、このアメリカの地方色により、この特異な文学者の才能が動いてきたあとを、興味ふかくみるのである」(148) と述べ、南部のローカル・カラーの作家としてハーンを評価している。さらに志賀は「このような Hearn には、同じ時代、逆にアメリカからヨーロッパへ流れていった Saltus や Huneker の Bohemianism (そして exoticism) と共通したものが感じられる。そしてアメリカ文学史の上に、一種の新鮮な色彩を反映させているのである」(148-149) と説明を加え、アメリカ文学におけるハーン的位置を肯定的に捉えている。

またハーンのアメリア時代の意味や作品の魅力に関して、亀井俊介先生は『アメリカ文学史講義 2』（南雲堂、1998）の中で、*Creole Sketches* (1924) を取り上げ、「文章は落ち着きを増し、こまやかな描写をしながら、しかも審美的な感情を盛り、ところどころに幻想味も加えている」と述べ、さらに「ロマンチズムとリアリズムの間を行くような味わいがある」(63) と述べている。そして「彼の文学は日本で深味も洗練味も加え、第一級のものとなるんですが、アメリカ時代には直接的に自分をさらけ出しているところもあって、別種の魅力をたたえていたように思います」(ibid.) と結び、アメリカ時代の作品の魅力にはハーンの自己の表出にもあると述べている点が興味深い。

次に、『アメリカを知る事典』（平凡社、1986、2000）の「文学の歴史」の「ダーウィン以後の文学」の項で、巽孝之先生がハーンに関して、「黒人女性との疑似結婚生活に破れながらも、

1877年にニューオーリンズへ行きブードゥー教ゾンビの取材をし、まさにその後1890年には日本へ赴き民間伝承の収集成果を『怪談』(1904)として発表することで、文学史に銘記されるに至ったことを述べ、「まさしく新南部で培われたであろう彼のクレオールのエキゾティシズムはダーウィニズムのもとで培われた人種差別意識とも無縁でなかったはずだが、にもかかわらず、こうした多文化的条件がなかったらブードゥーのゾンビと日本的幽霊が彼の中でほとんど区別しえないほど二重写しになることも、ありえなかったろう」(373)と結んでいる。ハーンの作品の魅力の一つに、その霊的世界があると思うが、その霊的意識がアメリカでも培われたという指摘も興味深い。

最後に、渡辺利雄著『講義アメリカ文学史第1巻』(研究社, 2007)を取り上げたい。この本の「まえがき」で、「東京大学文学部英文科にアメリカ文学講座が設置されたのは、昭和37年(1962)であるが、アメリカ文学の講義それ自体は、早くも、明治31年(1898)、当時、英文科の講師だったLafcadio Hearnによって“Notes on American Literature”と題して行われており、ワシントン・アーヴィング、エドガー・アラン・ポー、そしてNathaniel Hawthorn, Oliver Wendell Holmesなど、19世紀の文学者が扱われていた」(vi)とハーンについて述べている。ハーンが日本で先駆けてアメリカ文学について講義を行ったこともハーンとアメリカ文学の関わりを考える上で重要な点である。

以上、アメリカ文学史でハーンに触れている本は他にもあるだろうが、島根大学附属図書館にあるアメリカ文学史に関する本から、ハーンに言及している本を取り上げてみた。

## 【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

### 第103回例会

2017年12月9日(土) 14:00~16:00  
島根大学附属図書館ラーニングcommons 2  
12名参加 “Sayōnara!” 684.1-687.13

### 第104回例会

2018年1月20日(土) 14:00~16:00  
島根大学学生市民交流ハウス  
13名参加 “Sayōnara!” 687.14-690.34

### 第105回例会

2018年2月10日(土) 14:00~16:00  
島根大学学生市民交流ハウス  
10名参加 “Sayōnara!” & discussion  
691.1-693.17

### 第106回例会

2018年3月10日(土) 14:00~16:00  
島根大学学生市民交流ハウス  
12名参加 “My First Day in the Orient”  
1.1-5.31

### 第107回例会

2018年4月14日(土) 14:00~16:00  
島根大学附属図書館ラーニングcommons 2  
13名参加 “My First Day in the Orient”  
5.32-10.22

### 第108回例会

2018年5月12日(土) 14:00~16:00  
島根大学学生市民交流ハウス 10名参加  
横山の下記のシンポジウムに向けての発表&  
“My First Day in the Orient”10.24-11.17

中・四国アメリカ文学会第47回大会  
会場：島根大学 大学会館3階 大集会室  
第二日 6月17日(日)  
シンポジウム(9:30-12:30)

ラフカディオ・ハーンとアメリカ文学  
司会 渡部 知美(島根大学)

1. 霊の創造—ハーンとトニ・モリソン  
発題者 渡部 知美
2. アメリカのゆくえ—世紀転換期のハーンとドライサー  
発題者 宮澤文雄(島根大学)
3. ラフカディオ・ハーンの中の二つの小説に描き出された母性愛  
発題者 横山 純子
4. ラフカディオ・ハーンとアメリカ—没後の社会的影響を中心に  
発題者 小泉 凡(小泉八雲記念館館長)

島根大学でこのようなシンポジウムが持たれることは意義深く、ハーンがアメリカ文学でもっと評価されることを切に願うものです。

---

編集後記：御寄稿いただいた先生方に感謝申し上げます。新入会員の方からの興味深い原稿で、この会に新鮮な風を吹き込んでいただきました。大変ありがとうございました。  
(高橋栄)

---